

「泥棒」

日本テンブルヴァン（株）井上拓郎

「仏具の盗難被害」

先月（2025年10月19日）、フランスのパリにあるルーブル美術館に泥棒が入りました。モナ・リザの肖像画（レオナルド・ダ・ヴィンチ）や、ミロのヴィーナス像（アンティオキアのアレクサンドロス）などの有名な作品が3万5千点ほど展示されている国立美術館です。泥棒が入ったのは、アポロンのギャラリーと言われるフランスの王侯貴族が所有していた宝飾品が展示されているエリアから、ダイヤモンドやエメラルドなどが施されたティアラやブローチ、ネックレスなどの宝飾品が盗難被害に遭いました。今回の盗難による被害額は、およそ155億円とも言われており、用意周到な計画性、手慣れた犯行形態から、ヨーロッパを拠点としてダイヤモンドなど宝石類の窃盗を行う国際的な犯罪組織ピンクパンサーの犯行ではないか、と言われております。このピンクパンサーは、過去には日本でも犯行に及んでおり、犯行に関わった犯人は窃盗罪などで禁固刑が言い渡され収監されましたが、盗難被害に遭った宝飾類は見つか

っておりません。これら被害品の多くは、ダイヤモンドなどの宝石類をばらして売り飛ばすなどしており、回収は不可能な様です。またルーブル美術館の盗難事件の一月前には、パリの国立自然史博物館から金塊4個と金が含まれた鉱物1個が盗まれる事件もありました。犯人は犯行当日にスペインへ渡り、バルセロナから中国へ出国しようとしたところを逮捕されました。捕まった24歳の中国籍の女は、被害に遭った2億6千万円相当（重さ約6キロ）の金塊のうち、溶かした状態の金塊1キロを持っていたそうです。近年日本でも寺院や神社を狙った仏具等の窃盗事件が全国的に増加しています。文化財の様な歴史的に価値のあるものから、ご本尊さまの様な価値の付けられないものまで盗難被害が増えており、特に無住や兼務寺院など日常的に人の出入りが少ない場所は被害報告が多い状況です。ちなみに文化庁によると、盗難を含む所在不明な文化財は135件あり、このうち社寺所有の盗難件数だけで23件となっております。盗難被害に遭った文化財や仏具などは、ネットオークションで取引されたり、海外の収集家の手に渡ってしまったりしている様です。

「兼務寺院の防犯対策」

無住や兼務寺院の盗難被害が増えていく昨今、防犯対策の強化が急務となっています。具体的には、防犯カメラの設置や、警報装置の導入、警備会社による機械警備の導入など、目に見える形の防犯対策がありますが、防犯カメラや警報装置があっても、覆面で顔を隠され、警報装置が鳴っても直ぐに対応できなければ抑止力は限定的です。し、機械的な防犯対策には限界があります。その為、地域住民と連携した見守り活動の推進や、常に参拝者がいるような開かれたお寺にする事が一番の防犯対策ではないでしょうか。加えて、仏具などの財産目録や財産台帳の整備や管理を徹底し、万が一盗難が発生した場合でも速やかに対応できる体制づくりが重要です。財産台帳に記録する際には、品名や点数、写真やサイズ、購入日や設置場所なども明記すると、より管理しやすいと思います。盗まれても気が付かない、なんて事は無いと思いますが、仏具の点数が増えてくれば増えるほど、管理が煩雑になりがちなので、財産台帳の記載内容の見直しされることをお勧め致します。